「観阿弥生誕680年世阿弥生誕650年記念―観阿弥と世阿弥の冒険―」開催のご挨拶

これまで京都府との共同企画として、2008年11月に「平安京のコスモロジー」（創元社より2010年に『平安京のコスモロジー』として出版）、2009年11月に「遠野物語と古典――物語の発生する場所とこころ」（創元社より2011年に『遠野物語と源氏物語――物語の発生する場所とこころ』として出版）、2010年11月に「平安京と祭りと芸能」（報告書掲載、また創元社より2013年に創元社より出版予定）、2011年11月に「ワザとこころ－葵祭から読み解く」（報告書および『モノ学・感覚価値研究第6号』に掲載、2012年3月刊）、2012年11月に「ワザとこころPartⅡ　祇園祭から読み解く」（報告書作成中、2013年3月刊予定）と5回にわたるシンポジウムを開催し、歴史都市・京都に伝わる伝統文化を、世界観・物語・芸能などの観点から論議してまいりました。

そして今回、これらの共同企画の延長で、シンポジウム「観阿弥と世阿弥の冒険」を開催する運びとなりました。本年は、観阿弥（1333～1384）生誕680年にして、世阿弥（1363～1443）生誕650年となります。その節目の年に、南北朝時代の混乱期を生き抜き、日本芸能史に新しい「複式夢幻能」という形式を確立していく観阿弥と世阿弥という2人の独創的な芸能者・芸術家の創造性の秘密とその「ワザとこころ」を探ることを通して、現代という混乱期を生き抜いていく知恵と活力と勇気を得たいと考えました。

そこで、能（猿楽・申楽）という芸能が、源平の合戦を始めとする戦乱や生老病死や無常の世相を含め、どのように時代の「苦悩」を掬い上げ、表現しているかを、観世宗家・観世清和師と能研究の第一人者である松岡心平氏を迎えて探ってみたいと思います。

本日のプログラムの流れは、大体、以下のようになります。

観阿弥生誕680年世阿弥生誕650年記念

―観阿弥と世阿弥の冒険―

2013年2月17日（日）13:00～16:30

大江能楽堂

■プログラム

13:00〜13:05 [挨拶] 吉川左紀子（京都大学こころの未来研究センター・センター長）

13：05～13：15[趣旨説明]　鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター教授）

13:15〜14：00 [基調講演]　「能の世界と苦悩の表現」観世清和師（二十六世観世宗家）

　　　　　　　　　　　　　　　ナビゲーター：鎌田東二

14：00〜14:30 [実演]　　 舞囃子「敦盛」観世清和

14:30〜14:50 [休憩]

14:50〜15:30 [講演]　「能の発生とその時代」

　　　　　　　　　　　松岡心平氏（東京大学大学院総合文化研究科教授・日本文学・演劇）

15:30〜16:30 [鼎談]　「観阿弥生誕680年・世阿弥生誕650年記念

　　　　　　観阿弥と世阿弥の冒険：伝統と革新」観世清和師＋松岡心平氏＋鎌田東二（司会）

世阿弥の『風姿花伝』第四神儀云には、「申楽、神代の始まりといふは、天照大神、天の岩戸に籠り給ひし時、天下常闇になりしに、八百万の神達、天の香具山に集り、大神の御心をとらんとて、神楽を奏し、細男を始め給ふ。中にも、天の鈿女の尊、進み出で給ひて、榊の枝に幣を付けて、声を挙げ、火処焼き、踏み轟かし、神懸りすと、歌ひ、舞ひ、かなで給ふ。その御声ひそかに聞えければ、大神、岩戸を少し開き給ふ。国土また明白たり。神たちの御面、白かりけり。その時の御遊び、申楽の始めと云々。委しくは口伝にあるべし。」とあります。

この「神楽」と「細男」と「神懸り」が何を意味し、それが能「三輪」や、観世宗家における「三輪」の小書きの「誓納」とどのように関係するのかも大変興味深い問題ですが、この『風姿花伝』において、開催に当たり、「神楽」や「申楽」の起源が語られている箇所を振り返っておきたいと思います。

『風姿花伝』において、世阿弥は「申楽」について、3つの起源神話を語っています。第一に神道系起源神話、第二に仏教系起源神話、第三に家伝系起源神話の3つです。

まず第一の神道系起源神話では、「申楽」はアメノウズメのミコトの神憑りに端を発する「神楽」に起源を持つと記されます。その「神楽」の後に、「細男」が出てくることに注意しておきたいと思います。

第二の仏教系起源神話では、釈迦説法の場での、外道を楽しませた「66番の物まね」から始まるとされます。

第三の家伝系起源神話では、世阿弥の先祖とされる秦氏の祖・秦河勝が聖徳太子の時代に同じく「66番の物まね」を始め、後に秦氏安に継承されたと記されます。そして「申楽」とは、聖徳太子自らが「末代」のために「神楽」の「神」の字の示す偏を取った字、つまり「申」の楽であると語るのです。加えて、「日本国においては、欽明天皇の御宇に、大和国泊瀬の河に洪水の折節、河上より一つの壷流れ下る。三輪の杉の鳥居の辺にて、雲客、この壷を取る。中にみどり子あり。貌柔和にして、玉の如し。これ、降人なるが故に、内裏に奏聞す。その夜、帝の御夢に、みどり子の云はく、『我はこれ、大国秦始皇の再誕なり。日域に機縁ありて、今現在す』と云ふ。帝、奇特に思し召し、殿上に召さる。成人に従ひて、才知人に越え、年十五にて大臣の位に昇り、秦の姓を下さるる。『秦』と云ふ文字、『はだ』なるが故に、秦河勝これなり」と、実に不思議な伝承を語っています。

この3つの起源伝承はそれぞれに大変意味深長で、いろいろなことを考えさせられます。

　その「意味」については、本シンポジウムにおいて、観世宗家や能研究の立場で、さまざまな角度から自在に語っていただきたいと思います。

　最後に日本の舞踊系芸能の流れを通覧図を提示しておきたいと思います。

古代の神楽／中世の申楽＝能／近世の歌舞伎／近代の新劇／現代のアングラ劇

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| 1. 古代
 | 神楽 | 祭りの場 | 仮面使用 | 神人一体（神懸り・神に成る） |
| 1. 中世
 | 申楽（能） | 橋掛り | 仮面使用 | 神人複合（神・霊・死者の化現・化身） |
| 1. 近世
 | 歌舞伎 | 花道 | 隈取り | 人間世界（市井の人情） |
| 1. 近代
 | 新劇 | 舞台と客席 | 素顔 | 内面、主客分離、舞台と観客席の分離 |
| 1. 現代
 | ｱﾝｸﾞﾗ劇 | ﾃﾝﾄ劇、市街劇 | 複面 | 舞台と観客席の境界を曖昧にする |

　能（猿楽・申楽）という「芸能」が、どのような形と力と意図をもって浮上して来たのか、観阿弥・世阿弥の時代とその創造性の内奥に触れていただければ幸いです。

　それでは、最後までじっくりとお楽しみください。

　2012年2月17日　京都大学こころの未来研究センター・鎌田東二拝